

【 106 】

氏名	河 合 辰 哉
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1008 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和53年12月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学 位 論 文 題 目	握力負荷心機図に関する研究 第一編 健常者の握力負荷心機図 第二編 本態性高血圧症の握力負荷心機図
論 文 審 査 委 員	教授 木村郁郎 教授 大藤 眞 教授 中山 沃

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

心機図法は日常Bedsideで簡便に測定し得る点で、心機能検査法として重要ではあるが、なお不明の点が多い。そこで第一編では、健常人を対象に安静時および握力負荷心機図法を用いて心血行動態の分析を行った。心拍数とQ-II^A時間、LVETは負の相関を示したが、PEP、Q-I時間との間には相関はみられなかった。また時定数が異なると波形が大きく変わり、臥位、年齢、性によっても多くの測定値に差が認められた。従って、諸指標の検討には時定数、体位、年齢、性を考慮する必要があると考えられた。握力負荷により血圧の上昇、心拍数、Q-II^A時間、LVET、PEP、ICT、PEP/LVETおよびA/E-O比の増大等を認めた。

第二編では、本態性高血圧症について同様の検討を行った。安静時には、心電図変化の軽い群ではhyperdynamic state、心電図変化の強い群では左心機能低下と考えられる所見を認め、握力負荷中の心機図でもほぼ同様の成績が得られた。更に握力負荷後には、各指標は心電図変化が増強するほど回復に遅延傾向を認めた。以上のことより、握力負荷心機図による本態性高血圧症の心機能評価にあたり、反応の大きさ、方向とともに回復に要する時間を加えることが有用と考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は心機能検査について心機図法により研究したものであるが、従来より重要であるがなお不明の点が多い本法について、健常者及び本態性高血圧症の握力負荷心機図において心機能あるいは予備能の評価において重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。